

序に代えて／ 都市のインテリアとは何か

私たちはこれから、日本インテリア学会に所属する建築研究者の一員として、都市環境を身近なものにする方策について研究レポートをまとめようとしています。インテリア、建築、都市と用語が少々錯綜していますので、以下にその理由を簡単にご説明して序文とします。

「都市のインテリア」とのややケレンねらいのタイトルが決まった折、支部の重鎮メンバーから「都市とインテリア」ではないのか？との意見が出されました。なるほど都市を公、インテリアを私と読み替えてみれば、¹のでないことは明らか、近代的都市理論では公私の混在は避けねばならない旧弊だったからです。編集者が若手教員だった半世紀前、住宅の設計課題は決まって「都市郊外新興住宅地に建つ庭付き一戸建て」でした。もはや戦後ではないと列島改造が叫ばれ、住宅は旧コミュニティーを離れて郊外の新興住宅地（ベッドタウン！）へ、陸続と移り始めていました。アメリカの社会学者D. リースマンの著書で「芝刈り機の傍でまどろむ郊外人が新時代を拓く」との旨の一文を見つけ、私も郊外に未来を夢みてフィールドワークに励んだ思い出があります。

＊

ではあえて今、「都市のインテリア」などと公私混同を是認するテーマに掲げる意図は何か。それは良い意味での公私混同（正確には混在）もあり得るし、むしろ望ましいということが、その後の研究で分かってきたからです。きっかけは1960年代の大学紛争にあります。世界規模で起きた大学紛争の余波がその後の大学の研究課題と方法論に及んで、ヨーロッパ、日本、中東等旧社会の街づくり（アメリカ人研究者から見て）が再評価され、住民参加を前提にする都市計画が日本でも腐心されるようになっていました。このレポート作成のヒントになったC.アレクザンダーの「パタンランゲージ」は、当時の高揚した空気を伝える記念碑的著作です。ちなみに筆者の検索では、パタンランゲージ全253編中164編が、これから取り組もうとする「都市のインテリア」に該当していました。例えば公園の木陰を日々の居場所にする計画術 60 ACCESSIBLE GREEN というふうに一。

アレクザンダーは天才、平凡人のわれわれには新種発見は難しいかもしれませんが、むしろ概観できる数に減らして要点を議論することが、これからできる研究の方向ではないかと考えています。歴史は繰り返される（蒸し返される一か）とは、歴史は再発

見られるとの意味であろうと思うからです。

＊

ところで建築とインテリアデザインの関係はどうあるべきでしょうか。日本インテリア学会は、新築が減って旧建物の保存再生が主たる仕事になるとの時流を捉えて1989年に発足していますから業界事情は明らかですが、理念的にはどうか。これには格好の故事があって参考になります。

インテリアデザイナー（室内装飾家）という職業は、古いマンションを改修して住み継いできた欧米社会には古くからあったようで、世界遺産となったシュレーダー邸の主、シュレーダー夫人がそうだったといえます。三人の子供を育てる寡婦の夫人が新居マンションを物色中に、ナギのコンポジションを実体化した肘掛け椅子 **Red & Blue** での時の人となっていたリートフェルトに出会い、マンションの改修の相談している内に限界を感じ、いっそ建ててしまおうということになったとか。シュレーダー邸の売店で売られているDVDによると、技術者ゆえに現実的なリートフェルトをシュレーダー夫人が叱咤激励して、あのような<穴だらけの家>になったそうです。ご本人がインタビューに答えてそう言っておられます。とにかく、シュレーダー夫人には色々と思いはあっても建てる技術が無い。そしてその思いとは、住宅の中に **Red & Blue** を置くだけでなく、その中に住むことだったという。まさに二人で一人、建築家とインテリアデザイナーのある意味で理想的な関係が、あの小邸には具現されているわけです。少し後にル・コルビジェがサヴォア邸で、近代建築を読み解くカギとなる<内部空間の外部化>を果たしていますが、シュレーダー邸はまさにその先駆け、インテリアと建築が、そして建物の内と外がボーダーレスになった瞬間（夫人は見学者が無遠慮で困ったとも言っておられます）の歴史的証人であるといえます。「パタンランゲージ」においても、住民と道行く人が玄関先で交流できる設計アイデアが、多数提案されています。

＊

私たちが「都市のインテリア」に取り組む理由は、以上の通りです。都市空間を自分の居場所にする工夫、今や過疎化を危惧される郊外住宅を都市空間として住み開き、活用する工夫等々の事例が、寄稿される予定です。

2016. 6 編集担当